

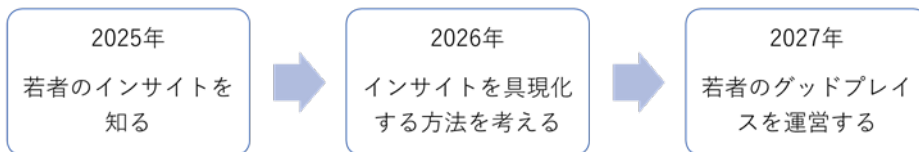
鹿角市中心市街地活性化 若者たちのGOOD PLACE—中高生と考える“わくわくが生まれる”居場所づくり—

- プログラム概要 : 鹿角市中心市街地の魅力を考えるワークショップ
 実習先 : 秋田県鹿角市中心市街地
 実習先情報 : 鹿角市の人口減少とともに中心市街地の賑わいが失われている。若年層の地元を上げるため方法を模索している。
 参加人数 : 本学8名、鹿角市中高生7名
 実習期間 : 令和7年8月3日～12日
 本学担当教員 : 小暮真人(教養教育部会)

1. 趣旨

令和4年から令和6年の3年間は鹿角市の中心市街地の活性化をメインテーマに鹿角市との共同研究を実施した。1年目は鹿角市全体の未来を描き、2年目はその将来像から鹿角市の人たちにとって中心市街地の価値は何かを考えた。そして、第1期最後の令和6年は中心市街地の新しい価値創造のために、中高生と大学生によるチャレンジショップによる実証実験を行った。

令和7年からは新たな3年間は中心市街地の新しい価値、居場所として若者たちの「GOOD PLACE」について研究することとした。



2. 「GOOD PLACE」

アメリカの社会学者のレイ・オルデンバーグが提唱した概念であり、本来第1の居場所である「家庭」、第2の居場所である「会社」や「学校」、第3の居場所が「コミュニティ」であり「GOOD PLACE」であるが、本活動においては、鹿角市の若年層がより多様な人々と交流し人生を豊かにする「第4の居場所(GOOD PLACE)」創出を目指す。

3. 学習内容

今年度は、中高生アンケート調査とヒアリングを行い、居場所について中高生のインサイト、本人も気づいていない居場所へのニーズを集めることとした。

実際の活動としては、①中心市街地各所ヒアリングでのヒアリング、②旧関善酒店こもせでの居場運営のテストマーケティング、③鹿角市の歴史・文化を理解するための旧関善酒店広間文化財プロモーション活動、を3日間3グループに分けローテーションで実施した。

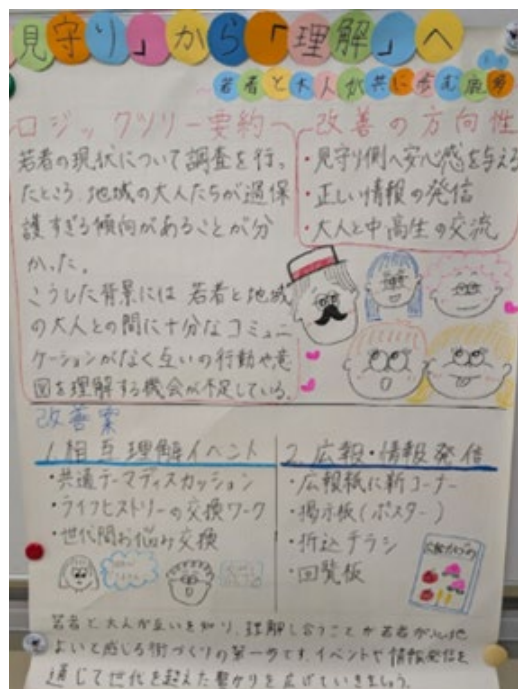
ワークショップではグループワークの技法を学びつつ、成果発表に向けたまとめ学習を行った。



4. 活動成果発表

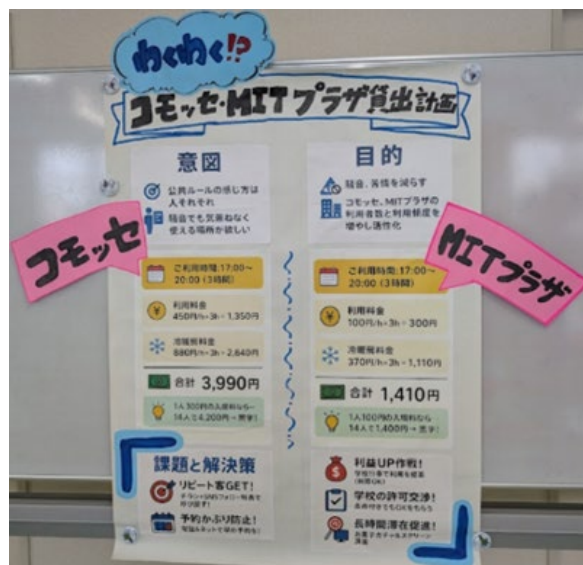
A班 「見守り」から「理解」へー若者と大人が共に歩む鹿角ー

ヒアリングで中高生の多くが、家庭でもない、学校でもない、地域コミュニティの居づらさを感じていた。コモッセは、声を出して会話し、談笑すると、周りの大人から怒られる、学校に通報される。街中をカップルが手をつないで歩いていても、問題視されてしまう。この気づきから「見守り」から「理解へ」というテーマになっている。また、一方的に、大人の過度な見守り、監視行動を問題にするのではなく、自分たち中高生も自分たちのことを大人に分かってもらう努力、コミュニケーションをしなければならないとしている。



B班 帰る理由を忘れる場所 in 鹿角

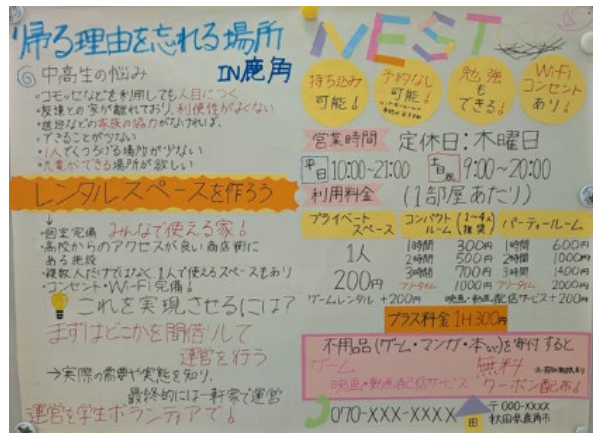
ヒアリングで中高生の悩みを丁寧に聞き取っている。人目につく、利便性が良くない、家族の協力がなくてできない、一人でくつろげる場所がない、充電できる場所がないなど、中高生が切実に感じている。つまり、これまでの大人には、中高生対策として「人目につかない場所」、「利便性を良くする」、「家族の協力がなくてもできる」、「一人で入れる場所」、「充電できる場所」を整備するという発想はない。ここを乗り越えることができるかが、大人に課せられた宿題であるが、B班では中高生のニーズに応えるレンタルスペースを具体的に提案している。



4. 活動成果発表

C班 わくわく!? コモッセ・MITプラザ貸出計画

中心市街地の中高生の居場所として、コモッセとMITプラザの活用を具体的、実用的なプランとしてまとめている。それだけでなく、受け取ったニーズ、ウォンツをヒアリングによる様々なニーズを鹿角市の地域別に落とし込んでいる。鹿角市の中心を花輪とした上で、尾去沢は自転車、徒歩で中心市街地に来れるが、八幡平、十和田になると車に頼らざるをえない。スポーツができる広い場所は中心市街地よりもそれ以外の地域の方が適当であるなど、今後の公共施設の整備計画の参考にもなる要素がある。



5.まとめ(担当教員 小暮真人)

進学や就職で鹿角を離れ、様々な経験をする中で、人間として大きく成長させてくれる。鹿角市に大学がないことを逆にとれば、鹿角市の中高生の多くは親元を離れ、大きく成長するチャンスがあるということになる。

現状でも鹿角市ではある程度のUターンが毎年あるが、中学生、高校生の多感な時代に素晴らしい経験をする中で、故郷に対するポジティブな意識が強くなり、自分の夢を叶えるために、鹿角市を離れても、いつかは戻ってきてくれる可能性が高くなる。その素晴らしい経験は、もちろん、家庭でも、学校でも、既存のコミュニティでもできる。

しかし、中高生アンケート、ヒアリング、今回のワークショップの各班の提案内容からすると、中高生たちが自然と集まり、自由に活動できる、多少騒いでも文句を言われたい居場所が求められている。確かに、勉強したい者は、既にコモッセ、図書館など静かに学習できる場を利用できるが、友達と飲み物を飲みながら談笑できる場、遊べる場、歌える場所、体を動かせる「わくわくが生まれる居場所、GOOD PLACE」はない。

また、若者のGOOD PLACEでどんなことができるかは中高生が自ら考え、中高生が主体的に運営し、大人は必要最小限の見守り(絶対的監視ではない)という場ではないだろうか。

来年度は、今年度のまとめを再度整理した上で中高生のインサイトを形にする方法を考えていきたい。

